

『春の雪』の小説構造可視化

— 三島由紀夫『豊饒の海』の絵解き —

谷口敏夫^{*1}

1 はじめに

現代、長編小説はミステリーをはじめとするエンターテインメントから、純文学までジャンルとして確立し隆盛である。この、これまでの「小説」とは多少ニュアンスが異なる現代の長編小説は、公共図書館でも利用が多い。京極夏彦に例をみるような超・長編小説が読者をにぎわしている。京極の講談社文庫版『魍魎の匣』^{もうりょうの はこ}は本編で1050頁、『狂骨の夢』も970頁と大部である。従来の仕様では、長編小説二、三冊分の厚さをほこる。たとえば本論にみる三島由紀夫『豊饒の海』四部作も、新潮社文庫版では409、445、372、303頁であり合計で1529頁の長編小説となる。豊饒の海はおおよそ全54巻の源氏物語と同じ程度の長さである。

こういった長編小説を読者は普通、冒頭から時間をかけて受容していく。鑑賞としてはそれでよいし、映画とおなじく時間芸術の場合にはそれ以外の享受は難しい。だが、読者や司書が事前に適切な作品を選ぶことを考えると、こういった読み方だけでは満足できない場合も生じる。あるいは、一旦読んだあとも、作品の全体をより鮮明に把握するために、再度冒頭から順に読み返していくのは、研究者ならいざ知らず、一般の読者や、公共図書館の利用者、あるいは作品を適切に利用者に案内する司書にとっては無理がある。

本研究は、以上のような不都合を、小説構造の可視化を計ることにより解消

*1 京都光華女子大学文学部教授、情報図書学専攻、司書課程担当、taniguti@koka.ac.jp

する試みである。すなわち、時間芸術である長編小説を地図のようなパターンとして捉え、内容を短時間で把握、理解するための方法論である。すでにくつかの実験^{*2}を重ねてきたが、今回は三島由紀夫『豊饒の海』から、その第一巻『春の雪』を題材にして、小説構造の可視化をおこない、そこから得られる文章地図やクラスター分析による樹図が実際の作品内容を反映しているかどうかについて検討を加えた。

2 実験・調査の目的と方法

本論の目的は、長編小説の全体構造を登場人物、および読み解く鍵となる用語（鍵語）によって可視化し、把握することである。このことから、小説の構造や流れが理解でき、作品のより深い鑑賞を可能とする。また、将来のビジュアルな情報検索に応用すれば、複雑な長編小説を事前に分析する一助ともなる。研究者を始め、「読書」に関わる司書や、関心の深い読者の文章理解を支援することが期待できる。

方法は、従前使ってきたKT2システム^{*3}での文章内位置付き用語抽出を基本にし、等高線グラフで文章地図^{*4}をつくり、今回はその妥当性を勘案するためにクラスター分析^{*5}を用いた。

調査に使った小説は新潮社文庫によった。『春の雪』は実質405頁あり、全55章、400字原稿枚数784枚（405p X 18行 X 43文字）の長編小説である。そのあらすじを新潮社の案内記事から引いておく。

一卷 春の雪

維新の功臣を祖父にもつ侯爵家の若き嫡子松枝清顕と、伯爵家の美貌の令嬢綾

* 2 谷口敏夫「物語とコンピュータ」

<http://www.koka.ac.jp/taniguti97X/Monogatari/Suiri/Suiri.htm>

* 3 谷口敏夫「KT 2の世界」<http://www.koka.ac.jp/taniguti96M/0/20/KTCoder/KTCodaer.html>

KT2に関して最近の包括的論文には、川端亮「コンピュータ・コーディングによる宗教的ライフ・ヒストリーの記述」宗教と社会、七号、2001.6がある。

* 4 谷口敏夫、日本語文章の可視化—保田興重郎『日本の文學史』—、光華女子大学研究紀要、38（2000.12）、pp11-168 に詳しい方法論を載せておいた。

* 5 システムは市販の「Let'sStat!Pro」を用いた。

<http://member.nifty.ne.jp/QZM01222/LetsStat/lslIndex.html>

倉聡子のついに結ばれることのない恋。矜り高い青年が、<禁じられた恋>に生命を賭して求めたものは何であったか？——大正初期の貴族社会を舞台に、破滅へと運命づけられた悲劇的な愛を優雅絢爛たる筆に描く。現世の営為を越えた混沌に誘われて展開する夢と転生の壮麗な物語『豊饒の海』第一巻。590円（本体）／105021-X新潮文庫20世紀の100冊：豊饒の海／三島由紀夫
<http://www.shinchosha.co.jp/20century/105021-X.html> (2001年8月採取)

3 文章地図

表1に、KT2システムで作品から抽出した用語のうち、頻度数20以上のもの105例をあげた。用例は人名が上位を占め、大正時代当時の上流階級を表す{侯爵、若様、電話、馬車、妃殿下、伯爵、椅子}などに特徴を持つ。哲学や政治論を含む生硬な用例は、上位には見あたらない。

表1: KT2による高頻度用語『春の雪』

頻度	用語	頻度	用語	頻度	用語	頻度	用語
995	清顯	51	殿下	30	存在	22	伯爵夫人
606	聡子	50	息子	30	松枝家	22	侯爵夫人
405	自分	50	人間	30	時代	22	危険
327	本多	49	世界	30	思想	22	椅子
251	藝科	47	仰言	30	一方	21	面白
170	飯沼	45	意志	29	馬車	21	日本
151	侯爵	45	綾倉家	29	今度	21	打明
131	二人	44	若様	29	月修寺	21	相手
129	王子	44	今日	29	シャム	21	場合
125	伯爵	43	本当	28	世間	21	主人
120	言葉	42	松枝侯爵	28	松枝	21	次第
93	彼女	40	宮家	27	少年	21	何一
83	門跡	40	グッサダ	27	一度	21	パンタナデイド
78	夢	38	清様	26	歴史	20	房子
78	部屋	36	祖母	26	自然	20	病気
67	気持	36	写真	26	一老	20	必要
65	感情	36	時間	25	妃殿下	20	微妙
62	子供	36	山田	25	着物	20	秘密
61	手紙	36	何事	24	肉体	20	繁邦
58	夫人	35	姫様	24	青年	20	大切
56	責様	35	微笑	24	制服	20	瞬間
56	学校	35	申上	24	意味	20	散歩
54	不安	34	電話	23	廊下	20	最後
54	シャオピー	32	指環	23	同時	20	侯爵家
52	恋	31	東京	23	若者	20	玄関
52	優雅	30	母屋	22	友情		

3. 1 地図化

用例の中から主人公、および主な登場人物を選び、本文を精査することにより名寄せを行った。すなわち、主人公の松枝清顕は、本文では清顕（おもに地の文）、清様（聡子からの呼びかけ）、若様（蓼科や飯沼からの呼びかけ）と呼ばれている。これらは明確に松枝清顕を指すのでまとめた。ただし、「松枝」という呼称は松枝侯爵や松枝家と混じるので無視した。さらに、「自分」は文脈に強く依存し、友人の本多繁邦とも混じるので無視した。名寄せの結果、以下の左端の人物11名を再定義した。数字は総頻度である。

松枝清顕	(1086 : =松枝清顕+清顕+清様+若様)
綾倉聡子	(649 : =綾倉聡子+聡子+姫様)
本多繁邦	(359 : =本多繁邦+本多+繁邦)
蓼科	(251)
飯沼	(171)
松枝侯爵	(248 : =松枝侯爵+侯爵)
綾倉伯爵	(162 : =綾倉伯爵+伯爵)
門跡	(95)
ジャオ・ピー	(75 : =ジャオ・ピー+パッタナデイド)
クリッサダ	(49 : =クリッサダ+クリ)
ジン・ジャン	(18 =月光姫： パッタナデイド殿下の恋人であり、参考にした)

この11名の出現を各章単位でまとめ、文章地図として表したものが図1である。エクセルの等高線グラフ機能を用い、区切りを5、最大25までを表示した。横軸は左から1章～55章とし、縦軸に人名を置いた。図中、横軸の章と章とは補間して計算されているので、図は相互に引き合い変形している。

文章地図の分析は次節以下行うが、簡単に説明しておく。たとえば松枝清顕は1～55章まで間断なく登場する。つまり、内容を読んでいなくても、このようなパターンを持った人物は主人公であると推測できる。また、松枝侯爵と綾倉伯爵は後半部で共起しながら目立った頻出パターンを見せる。これはこの

春の雪／三島由紀夫『豊饒の海』(一)
登場人物

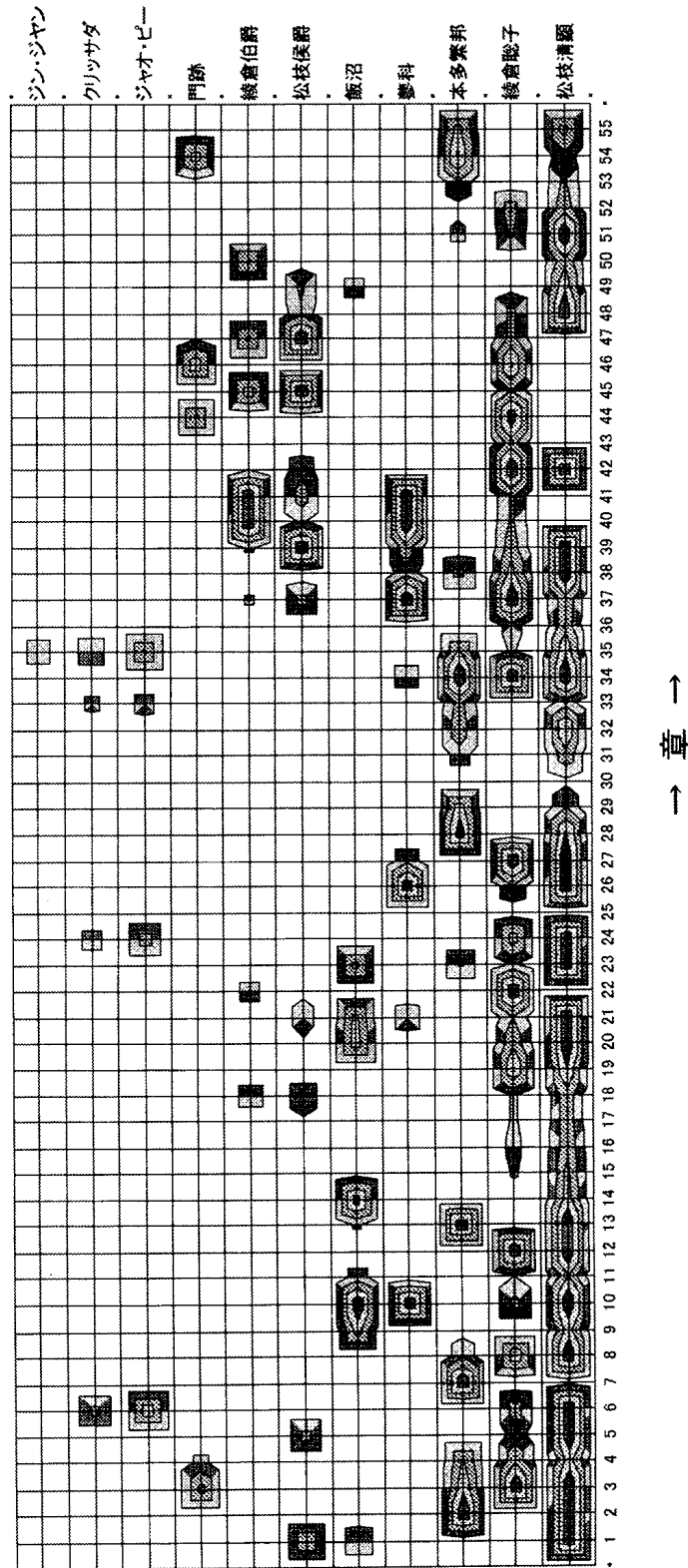


図1:『春の雪』登場人物

部分（39章～47章）で、なんらかの、共起・頻出せざるを得ない状況が起こったと予測できる。

3. 2 時系列（通時的）データから見た分析

本論での通時的分析とは、ある人物が第1章から終章にかけてどのように出現するのか、そのパターンを分析することである。これまでの実験によると、ミステリでは犯人が終盤で極端に出現する事例*⁶がある。そこにはなんら神秘性はなく、ミステリー小説は倒叙法を除き、犯人が終盤に解き明かされる構造を持っているからである。人智によるテキストは明確な構造を持つ。それは、長い帯状の文章の流れから、二次元としての文章地図にメディア変換することで、構造がより鮮明になる。

ここで、松枝清顕、その恋人綾倉聡子、友人本多繁邦の三名は、序盤から終盤まで一貫して登場する。『豊饒の海』全四巻を通してみると、このうち清顕は『春の雪』で終わり、聡子は最終巻『天人五衰』で再登場する。本多繁邦は各巻に登場し、観察者として振る舞う。この『春の雪』では三名が終始登場するが、副主人公の登場章は、主人公清顕に比べてパターンが特徴的になる。

○まつがえきよあき松枝清顕

主人公として終始登場する。例外として43～47章にかけて出現しない。これはこの間の章で頻度がゼロではないが、パターンに現れないほど少ない。この部分は、どういんのみやはるのりおう洞院宮治典王との婚姻勅許が下ったにもかかわらず、清顕は年上の聡子を妊娠せしめ、その結果43章で聡子が大阪に行き墮胎し、ついで奈良の月修寺で落飾、「強度の神経衰弱」という名目で宮家から婚約が破棄される過程が描かれている。すなわち、その間の事情に清顕は一切関わることができず、剃髪は聡子自身の手でなされた。以後、清顕は二度と聡子と対面することができなかった。

* 6 浅茅原竹毘古「長篇小説のKT2分析」

<http://www.koka.ac.jp/taniguti97X/Monogatari/Suiri/02AJsuiri/No2AJMikeSuiri.htm>

○綾倉聡子^{あやくらさとこ}

聡子は、優雅に生き、歌を家業とする格式高い羽林家綾倉伯爵^{うりんげ}の長女で、清顕より二歳年上だった。聡子と清顕は姉弟のように育った時期がある。かつて無骨だった松枝家に雅をいれるため、清顕が綾倉家に幼少時預けられたことによる。弟のような清顕は聡子への気持を自然に出さなかったが、聡子と宮家との婚姻勅許が下ったとき、始めて自らの恋を聡子にぶつけてくる。

聡子は地図の28～33章に空白をもつ。これは宮家との婚姻までの待機時期である。この間、28章では清顕が本多に聡子との密会をうち明け、29章では本多自身の将来（裁判官）を決定する裁判傍聴があり、その後清顕、本多、シャムの二王子は鎌倉の松枝家別荘（終南別業）で夏を過ごす。聡子不在のまま、本多は清顕の脇腹に三つの黒子を発見する。

特筆すべきは、聡子が終盤の53～55章（最終）で登場しないことである。これは、聡子が帯解月修寺で剃髪し、ついに瀕死の清顕と対面しなかったことを意味している。そこに聡子の永遠の不在を予兆させる。これは最終巻『天人五衰』最後の文と明白に照応する。

○本多繁邦^{ほんだしげくに}

清顕の唯一の友人である学習院同窓、間近に帝大法学部学生となる本多繁邦は、清顕や聡子に比べて登場回数が低い。しかし地図を見ると本多は序盤（1～13章）、中盤（28～38章）、終盤（53～55章）と特徴的なパターンを見せる。これは彼の「役割」を表している。すなわち本多は観察者、証言者として、小説構造での節目に登場する。つまりこの巻では主人公松枝清顕の大事に、常に直面する。

巻頭にあたる1～4章では、本多が清顕にとってどのような友人であるのかが描かれている。本多は清顕とは対極に位置する青年である。

本多は年よりも老けた、目鼻立ちも尋常すぎて、むしろ勿体ぶってみえる風貌を持ち、法律学に興味を持っていたが、ふだんは人に示さない鋭い直観の力を内に蔵していた。そしてその表面にあらわれるところでは、官能的なものは片鱗もなかったけれど、時あってずっと奥処で、火の燃えさかって薪の鳴っている音がきこえるような感じを人に与えた。（2章）

7章は、本多の法律学徒としての内面と、又従兄妹房子との出逢いがあり、そこに清顕との対比はなく本多繁邦が独立して描かれた章である。

13章にいたって「清顕」を起点とする本多の人生を予兆させるテーマが現れてくる。すでに前章の12章では、本多の知らないところで清顕は禁断の恋に一步踏み出した。13章で清顕は学習院を休んだ。本多は清顕不在の学校で、彼の死をはじめて理由なく予感した。

朝から清顕の机が空になっている。それがいかにも、かねて怖れていたことが現前したような怖れを本多に与えた。清顕の机は窓ぎわだったから、窓の雪明りは、その古い傷だらけの机をおおう塗りたてのニスにまともに映って、机はあたかも白布におおわれた坐棺のように見えた。(13章)

翌朝本多と清顕は「歴史と、人間の意志の成就」について語りあう。

歴史に意志があるかね。歴史の擬人化はいつも危険だよ。俺（本多繁邦）が思うには、歴史には意志がなく、俺の意志とは又全く関係がない。だから何の意志からも生れ出たわけではないそういう結果は、決して『成就』とは言えないんだ。それが証拠に、歴史のみせかけの成就是、次の瞬間からもう崩壊しはじめる。(13章)

本多は76歳になる最終巻『天人五衰』で、清顕の最後の転生者と思われる安永透に会うまで、いやおうなく「転生」という歴史の意志を眼前に突きつけられる。それは13章で、歴史の無意志を言立てた本多を嘲笑するような後半生であった。本多は、すなわち「歴史の意志＝転生」を確認するために最終巻まで生き続けることになる。彼は清顕の生きた事実とその転生の証言者となるのである。証言者の認識の妥当性は最終巻最終段にいたるまで伏せられている。

序盤の本多は、松枝清顕の死を予兆し、いまだ表面には現れない清顕の輪廻転生への「意志」に関わり始める。

中盤の直前、本多のいない27章で清顕と聡子は危険きわまりない関係を持ってしまった。聡子を犯すことは、当時の時代相では勅命をないがしろにすることであり、松枝家、綾倉家ともに本人達だけではなく、家が破滅することを意味する。それだけではなく27章は『春の雪』での一つの極みであり、文章表現の極致に至ったと言って、過言ではない。

本多はその後、28章から、途中休憩もはさみ38章まで登場する。この中

盤での本多は、鎌倉の海岸で清頭の脇腹に三つの黒子を見る、清頭と聡子の重なる密会を介助する、聡子から永遠の何かを教えられる、などの転機が重なる。

「どんな夢にもおわりがあり、永遠なものは何もないのに、それを自分の権利と思うのは愚かではございませんか。私はあの『新しき女』などとはちがいます。・・・でも、もし永遠があるとすれば、それは今だけなのでございますわ。・・・本多さんにもいつかそれがおわかりになるでしょう」

本多は清頭がかつて聡子を、どうしてあんなに畏れていたか、その理由がわかるような気がした。(34章)

この「永遠」に関する聡子の言葉を本多繁邦が本当に理解するのは、最終巻『天人五衰』まで待たねばならない。その時はじめて、76歳になった本多は、二つ年上の門跡（聡子）の言葉から、永遠のなんたるかを究極的に認識せざるを得なくなる。そのためにこそ本多はここで「永遠」を語る友人の恋人と相対しておかなければならなかった。若き本多は聡子という「永遠」の具現者に、この時出逢っていなければならなかったのである。

終盤での本多繁邦は、特に終章にあたる55章での役割が重要である。『春の雪』を文学鑑賞からみると、まず27章、霞町三番地第三連隊近くの将校下宿での、清頭と聡子との纏綿とした男女の雅を筆頭にあげることができる。そのことの結果として清頭の死が終章で現れ、これは『豊饒の海』全巻にわたる主調音となる。終章の55章は作品鑑賞の上からも、小説構造の上からも最も注目すべき章である。

本多は、奈良・桜井線帯解駅近くの「葛の屋旅館」に病臥する清頭を訪ねる。清頭に代わって月修寺門跡を訪ね、聡子との面会を求める。すべては拒否され、清頭は寝台車に病臥したまま帰京し、二日後に二十歳で死んだ。本多が聞いた最後の言葉は、

一旦、つかのまの眠りに落ちたかのごとく見えた清頭は、急に目をみひらいて、本多の手を求めた。そしてその手を固く握り締めながら、こう言った。

「今、夢を見ていた。又、会うぜ。きっと会う。滝の下で」

本多はきっと清頭の夢が我家の庭をさすろうていて、侯爵家の広大な庭の一角の九段の滝を思い描いているにちがいないと考えた。(55章)

この段は文学の修辞が胸を打つだけでなく、長編『豊饒の海』を成立せしめた原因がここにあるという、その物語の構造が肺腑を突く。「又、会うぜ。き

っと会う。滝の下で」この末期の言葉が、二巻以降どれほどの重み、重奏性を持ったことであろう。それが、長編小説として無限の世界を作り得た最大の要因となった。本多繁邦は、その最重要時点での証言者として、この巻を終えたのである。

○^{なでしな}蓼科

蓼科は綾倉家の京都時代から四十年も仕えた老女であり、聡子の守り役と言って良い。その守り役たる老女が、なぜ宮家に嫁ぐことの決まった聡子を清顕の求めに応じて、逢瀬を手引きしたのか。

蓼科の役割には重いものがある。地図で分かるように10、26章、37～41章という風に、孤島のように出現している。蓼科の手引きによって松枝清顕は聡子との悲恋に直面し、蓼科によって書生飯沼は女中みねとの間に、飯沼勲（第二巻『奔馬』主人公）をもうける。10章は飯沼に女中みねとの関係を使囀し、26章は清顕に逢い引きの場所として将校下宿を教え、そうして37～41章では、蓼科が清顕と聡子との現実破綻への手引き者となった。

実際蓼科の役目は聡子を悪から護ることにあった筈だが、燃えているものは悪ではない、歌になるものは悪ではない、という訓えは綾倉家の伝承する遠い優雅のなかにほのめかされていたのではなかったか？（37章）

やりて婆というよりは権謀術数の化身、公家文化・都風を体現した存在、それが要所要所で作品の展開をもたらす。本多繁邦が観る人、観察者なら、蓼科は実効行為の介添者であることによって作品世界を展開させる。地図（図1）でのバランス良く配置された三つの島がそれを語りかけてくる。

○^{いいぬましげゆき}飯沼茂之

飯沼は二十四歳薩摩出身、松枝家の書生であり、清顕の家庭教師として7年勤めている。松枝侯爵のお手つき女中みねと懇ろになり、他日侯爵家を出る。二巻『奔馬』では、清顕の転生と考えられる飯沼勲の父として再登場するが、また国粹団体「飯沼塾」塾長となっている。

飯沼は『春の雪』でどのような役割を持っているのか。地図によれば彼は前半部に登場するが、中盤23章以降は姿を消す。これは女中みねとの関係が松枝侯爵に露見し清顕の前を去ったからである。

「それでお前は、ここを出て間もなく、みねと夫婦になるんだね」(～中略～)
「はい。そう仰言っていたかと……」と飯沼は又泣いた。そして懐ろから粗悪な漉返紙を出して涙をかんだ。

清顕の口を出る一語一語は、正にこういう場合にはこう言うべきだと、彼が考えていたとおりに円滑に流れ出て、何ら感情の裏附のない言葉のほうが、人を一そう感動させるという現場をありありと示した。(23章)

清顕の十二歳から十九歳の今日まで飯沼は忠実な僕だった。飯沼は野卑を代表していた。その野卑は清顕に貴族としての「俗」を教えることとなった。清顕が「感情の裏附のない」「心の政治」を学ぶことこそ、もっとも「俗」になじむことではないか。地図による23章の飯沼は、彼自身の退場と、結果として清顕を成熟させる機縁となった。

ここで一旦飯沼は小説から姿を消すが、最後に、49章で突然彼の名が地図にぼつりと表れる。松枝侯爵は飯沼が新聞に載せた侯爵糾弾文を見て激怒した。

文章はいかにも国士風で、「松枝侯爵の不忠不孝」という見出しがついていた。(～中略～) 頭のおかしい公家の娘をお世話して、勅許までいただき、納采之儀寸前になって、事があらわれて瓦解しても、侯爵自身は世間へ名前の出ないのをよいことに、恬然として恥じないのは、大なる不忠であるのみならず、維新の元勳たる先代侯爵に対しても、不孝の極みである、と弾劾している。

父の激怒にもかかわらず、清顕はこれを読んだときに、(～中略～) 少なくともこの一文は、清顕が父侯爵のようになってくれるな、という暗示的な教訓を含んでいるように思われた。(49章)

飯沼の第一巻での登場はこの49章で完全に終わる。この段落は、清顕と飯沼の関係表現と言うよりも、国士となっていく飯沼の変わり様を描き、後に二巻で「飯沼塾」を開き、かつまた、息子の勲が国士として活動していくことへの、小説構造上の堅固な伏線と解釈する。地図に現れた飯沼の49章での孤立した登場は、重要な意味があったと言えよう。

○そのほか

松枝侯爵、綾倉伯爵は清顕と聡子の不祥事の後始末のために後半部での特徴的なパターンを見せるが、本論では省略する。月修寺門跡は、本論4章でとりあげ、シャムの二王子とジン・ジャンについては、3.3でとりあげる。

3. 3 断面（共時的）データから見た分析

本論での共時的分析とは、各章でどのような人物が同時に出現するのか、すなわち章単位での人物の共起を見ることである。このことによって、人物対や人物間の相関がある程度把握でき、また本文に当たることにより、共起せざるを得ない事象を検討する引き金となる。たとえば、清顕と聡子とは終始共起することによって、二人が深い関係にあることを類推できる。先述した松枝侯爵と綾倉伯爵は39～42章、45～47章にかけ特異的に強い共起を地図に明示している。これは本文参照によれば、若者達の不始末に両家が右往左往している様子を表した結果のパターンである。

しかし本節では、通常のような共起については、過去に別の作品でいくつか検討したので割愛する。以下に、地図上なものも共起しないという特異な断面に関して考察する。

○主要な人物がほとんど登場しない章

丁度中盤にあたる25章と30章とを文章地図（図1）で見ると、リストした11名が登場せず、2カ所とも縦が空白になっている。もちろん詳細に見てみれば、各人の頻度が一定の値（この地図では5）に満たないので鳥が現れないだけである。しかし、本文を読むだけや、頻度数だけではこの特異性は気が付きにくく、地図にしたとき始めて他章との違いが立ち現れてくる。これを空白の共起と名付ける。

○空白の第25章

25章は、まず文章量として文庫1頁に過ぎない。全55章405頁なので各章平均は7.36頁となり、この1頁というのは少ない。章立ては作者の構想力の中で作られるものだから、なんらかの意図があると推測できる。ここは前章で宮家と聡子との婚礼の勅許がおりた後に続く章であり、内容は清顕の内面描写である。本文にあたれば、この章が『春の雪』の構造上、明白な展開点であることがわかる。

・・・高い喇叭の響きのようなものが、清顕の心に湧きのぼった。

『僕は聡子に恋している』

いかなる見地からしても寸分も疑わしいところのないこんな感情を、彼が持つ

たのは生れてはじめてだった。

『優雅というものは禁を犯すものだ、それも至高の禁を』と彼は考えた。

(～中略～)

『今こそ僕は聡子に恋している』

この感情の正しさと確実さを証明するには、ただそれが絶対不可能なものになったというだけで十分だった。(25章)

大正という時代設定から、婚姻の勅許が下った聡子は、清顕の恋愛対象としては「絶対」に手の届かない存在になった。その時になって初めて清顕は『今こそ僕は聡子に恋している』と自覚した。以後、27章に至り蓼科の手引きにより、「霞町三番地のあたりから、三聯隊の正門のほうへ廻って下りてゆく坂道～その坂を下りたところ」にある将校達の下宿で清顕と聡子は結ばれる。この下宿は二巻『奔馬』の「昭和神風連」事件で重要な箇所となる。

25章は簡潔な内面描写によって、清顕が静から動に向けて、優雅に憧れる者から優雅の実践者に転回する場面となっていた。それが、地図の空白となって現れた。三島はこの章で、文章表現上「今こそ僕は聡子に恋している」を記すだけで充分と考えたのではなかろうか。

○空白の第30章

30章の空白は、パッタナディッド殿下（ジャオ・ピー）の指環がなくなり、殿下と従兄弟クリッサダ王子、学習院寮舎監の三人で指環を探す場面である。これが転機となって、事態が切迫し、二王子は帰国するとまで言い出した。次に続く31章以降では、二人の突然の帰国希望を憂慮した松枝侯爵は、二王子を鎌倉の別荘へ招くことにし、その相手として清顕と本多をつけて送り出した。

30章での、この転機をもたらした指環の紛失は、指環に象徴されるジン・ジャン（月光姫）の喪失を意味している。巨大なエメラルドの指環はパッタナディッド殿下への、恋人ジン・ジャン（月光姫）からの餞別である。これは清顕自身にもジン・ジャンとの曖昧な関連性を気付かせている。すでに清顕は夢日記（11章）で、清顕自身がシャムの地で指環をはめ、覗き込むと女が写っていた、そんな夢をしるしている。

この30章は文庫4頁分で、各章平均7頁強の半分である。頻度算出は各章

単位で絶対数をとっているのので、頻度5区切りの地図では人名が空白となり、この空白が、突然の挿入章であることを気付かせる。25章のような大上段に振りかぶった内容ではないが、この30章の挿入により、25～30章が小説構造上、正中央の踊り場であることを明確にする。その踊り場のその中央27章には、日本文学史上まれにみる婉然とした男女の雅がある。

要するに30章は終盤にいたる展開へのトリガー（引き金）、呼び水になっている。

30章の指環喪失事件は、31章でシャムの王子を鎌倉に誘うことになり、32章で本多は鎌倉の砂浜にうたた寝する清頭の身体に初めて「徴し」を観る。

たまたま清頭は左腕を上げて後頭部にあてがっていたので、左の脇腹の、ほのかな桜の蕾のような左の乳首よりも外側の、ふだんは上膊に隠されている部分に、本多は、きわめて小さな三つの黒子が、集まっているのに目をとめた。（32章）

この三つの黒子は第二巻『奔馬』飯沼勲、第三巻『暁の寺』ジン・ジャン（パッタナディッド殿下は末娘に昔の恋人の名をつけた）、第四巻『天人五衰』の安永透にまで糸をひく。小説構造として、三つの黒子が転生の象徴となる。それは三羽の鳥にも、三星にも見える。またこの32章では、二王子によってシャムの仏教説話「転生」が語られる。

すなわち、30章での登場人物の空白共起現象は、挿入章としての指環喪失事件であり、それが31章、32章を導出し、作品の中核となる象徴「三つの黒子」と思想「輪廻転生」へと結びつけていく。

○空白共起の意味

本論での空白共起は、可視化手法として言葉の章内頻度での絶対数を用いたから生じたとも言える。すなわち25章と30章とは基底となる文章量が些少であるから人物の頻度もわずかになり、地図に現れなかったと、技術的にはかたずけてもよい。だが、なぜその章に限って短いものになったのかは、作者の明白な意図であったと言ってよいであろう。両章は作品中央にサンドイッチ状に挟まれた踊り場を設け、その中央27章に清頭、聡子のからみを描ききった。その様態は文章地図によってこそ明白に把握できる。

25章は、清顕の内面独白によって登場人物が不在になり、30章では指環喪失が中心となり登場人物が地図から消えた。いずれも、この小説の核になる転機の間であった。以後清顕は、転生の徴「三つの黒子」を本多繁邦という証言者にさらし、また勅許を破り犯し続けた。聡子は妊娠する。

3. 4 登場人物のクラスター分析

文学鑑賞の要諦は、最終巻『天人五衰』で聡子の言った「それも心々どすさかい」があたると考える。作品の姿は受容者の心の持ちよう、それぞれの心性によって容易に変わりうるものである。文学は近代科学の申し子ではない。文学を科学として分析するには、科学としての限界があることを銘記しなければならない。歴史始まって以来、人々の心の煮こごったものが文学として定着してきた。一方近代科学の中でも多変量解析手法、とくにクラスター分析は、樹図（デンドログラム）などの結果の鮮やかさにもかかわらず、分析結果の理由が明確でないことから様々な批判を受けてきた。つまり、結果が一意的（近代）科学ではないという批判が常にある。これは近代科学の問題であり、現代科学においては異なった見方も現れてきている。

○クラスター分析の意義付け

本論では、近代科学の範疇にありながら、常にある種の胡乱な印象を与えてきたクラスター分析のうち、階層的な手法によるユークリッド距離を用いたウォード法で分析を行った^{*7}。

文学は、一意には解釈も分析も出来ないが、結果のそれぞれに興味はつきない。クラスター分析も、鮮やかな分析結果を出すことに優れているが、一意ではない。ある結果と別の結果をもたらした「理由」を明確には定義できない。しかし、分析結果の理由は、本文そのものにあるのだから、分析手法「クラスター分析」そのものからの理由は不要と考えた。こうとも言える、文章地図は

*7 豊田秀樹『金鉞を掘り当てる統計学』講談社、2001.3は最近のデータマイニングに関して総合的な参考図書である。

用語の頻度によって小説の構造を表した。しかし頻度がなぜ地図に特定のパターンを表したかの理由は、本文そのものにあたるべきで、地図化にもちいた等高線グラフに求めても無意味であると。

本論の基本手法はKT2システムによるものであり、これには何らの神秘性もない。本文の用語を任意の位置付き（部章節段文）で抽出し、その位置と用語のマトリックスを文章地図や樹図にするのだから、非常に単純である。ただ、結果として文章地図は用語頻度という固い再現性を持つが、クラスター分析はパラメタや手法の適用によって結果が千変万化する。その変化のうちに、多様な視点のあることを見る者に気付かせるとも言えよう。

○登場人物の樹図と絵解き

図2に登場人物の分類結果をあげた。これは文章地図と同じ表データを用い、ユークリッド距離によるウオード法によって描かれた樹図である。樹図（デンドログラム）は各項目を右端の一点に収束する。右端の一点が大まかに言うと人物全体、あるいは作品そのものを意味すると考えてよい。

樹図から、幾つかの最少グループが徐々により大きなグループを作っていることが分かる。まず主人公「松枝清顕+綾倉聡子」の大グループと、本多繁邦

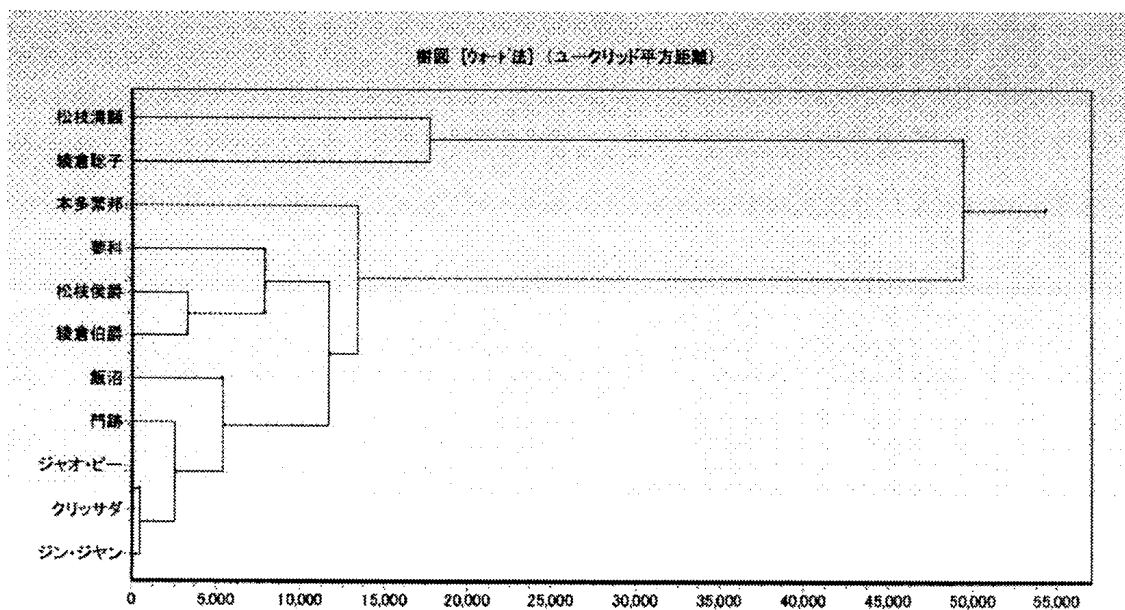


図2：登場人物の分類

を中心とする別の大グループ {本多繁邦+その他} に二分されている。前者は恋人同士として簡明に理解できる。清顕・聡子と、本多グループとの関係は、本文を参照した上で絵解きするならば、観察者である本多は「清顕と聡子の禁断の恋」という浮世離れした世界と、世俗のことに右往左往する現実世界とを、結びつける役割を持っていると言えよう。

これは、しかし本文による解釈であり、クラスター分析にその判定の理由を明示させることはできない。強いて言えば、「清顕と聡子と本多」という用語の章間共起が特徴的であるからこのようになった、と言えるだけである。それが恋愛・友人関係なのか、親子関係なのかは、本文精読や他の自然言語処理を待って始めて明確になる。

世俗世界の代表は {蓼科+ {松枝侯爵+綾倉伯爵}} グループである。本文参照によると、蓼科は綾倉伯爵家に京都以来四十年付き従う姥桜だが、彼女は松枝家と綾倉家とを、清顕・聡子の勅禁の恋愛という不祥事を介して結び付ける。蓼科は両家を思うままに操ったとも言えよう。それは金銭欲などの目的からではなく、世俗世界を自在に操ることができるという自負心からのものであった。このクラスターは鮮やかである。

蓼科と飯沼とが大グループ「本多」の直前でグループ化するのには、「聡子にとっての蓼科」と対比的に「清顕にとっての飯沼」とが重なった結果であろう。つまり、「清顕と聡子の悲恋」は蓼科や飯沼の相互関係によって結びつけられている。その関係とは、蓼科・飯沼がともに若き恋人同士の介添え者としての役割を持つことにある。ただしこれは本文参照の上での解釈である。

樹図に見られる飯沼と門跡との関係は謎である。これはクラスター分析に提供するデータの不備なのか、あるいは私の本文解釈のいたらなさなのかは、この段階では分からない。頻度にバランスを欠いた無意味なクラスターであるとも考えられる。

門跡とシャムの王子達との関係は、両者が独立して輪廻や転生に言及しているからと推測できる。門跡は次の4章で「鍵語」として考察する。

シャムの二人の王子と、そのクリッサダの妹、ジャオ・ピーの恋人であるジ

ン・ジャンが明確なクラスターを作っているのは、鮮やかである。

以上のように、クラスター分析はなお蓋然性を残しているが、文章地図とは別の観点から小説構造を可視的に表現する手法といえる。ここでは登場人物の類縁を推し量るために分類を行ったが、事前の解釈や了解なしで、用語の位置情報と頻度によって、人物の分類が明示されることの意義は、今後の文章解析や高次情報検索への適用可能性に期待できるものがある。

4 鍵語の分析

この章では小説構造を意味的に構成している概念群を考察する。ここで概念群とは、小説が表現しようとする諸概念の組み合わせと定義しておく。そのために各概念を代表する用語を「鍵語」としてあらかじめ選定し、これによって文章地図および樹図を作り、概念間の構造を可視化した。「鍵語」とは重要語という意味よりも、作品を読み解くためのキーとなる語と定義しておく。一般に『春の雪』のテーマは、「優雅」「禁断の恋」「輪廻転生」のように言われている。たとえば、本論巻頭においた新潮社文庫本の解説などにもそれが現れている。だから、鍵語もそれと近似的な言葉になる。

まず、通読後いくつかの語を選定し、その頻度総数を以下の表2のようにまとめた。

全55章、400字原稿枚数784枚の長編としては、鍵となる用語の総頻度が低い。表1の上位頻度をみても、表2からそこに入るのは「恋」だけであ

表2:鍵語と総頻度

	恋	唯識	輪廻	転生	夢日記	黒子
合計	52	9	4	9	7	7

る。すなわち、私が選んだ鍵語が私の主観だけでなく、ある程度『春の雪』を表す用語として妥当であるならば、用語の頻度の高低は、いわゆる純文学作品では、意味をなくすように思われる。

その傾向はきわめて文学的な作品およびその「鍵語」においては事実である。一般に、優れた文芸作品は言葉の使い方に慎重である。一つ一つの言葉を丁寧に使っている。だから、浜松中納言物語を下敷きにし、夢と転生をテーマにしたと評価される文学であっても、800枚近い現代長編小説に、「転生」という生の言葉はわずかに9回程度しか使われていない。これは、作品全体で「転生」を表現しているのものであって、直接的な言葉の使用は最小限度に抑えているからである。

だが、その注意深く最小限に使用された言葉が、一体どこで使われているのかを分析することは、作品の構造を読み解く上で非常に重要な手がかりとなる。

4. 1 鍵語の重み付けと人物

文章中の頻度が極端に少ない用語と、頻度の極端に大きな用語を重要視することは、ルーン以来、意義が低いように考えられてきた^{*8}。ルーンは常用語として使われる最大頻度グループの、次のグループに属する用語に重要語としての妥当性をみた。だから表1から言うと、ルーンの考えでは、清顕は重要でなくなり、本多、蓼科、飯沼近辺が最重要語となる。先に選定した表2の鍵語は低頻度であるから埒外のものとなる。しかし文学作品では、作者が一人称小説としない限り主人公名は高頻度となり、それはすでに述べたように小説の構造と直接関わりを持ってくる。たとえば、「清顕」は単独で995の頻度を持っている。それほどの高頻度であっても、ほとんど出現しない章も空白共起現象として起こり、それは小説の展開に特定の意味をもたらしている。他方、前述のように人が熟読し「鍵」となる用語であると判断したものが、極端に頻度の少ない用語となる。

補足的に言うなら、KT2法は単語の位置情報を生かしているので、ルーンのように論文一篇単位で計った手法とは、観測対象の粒度が異なるからこうい

* 8 谷口敏夫、「自動抄録の現在と電子図書館」情報の科学と技術、49(5)、1999.5、pp250-255

う結果が出たとも言えよう。

こういった文学作品に顕著にあらわれるレトリックに起因する用語頻度の差異を一つの地図で公平に見渡すために、本論では「重み付け」を用いた。具体的には、最高頻度の「清顕」の各章平均値を2で除した数を、鍵語に乗して(九倍)地図を作った。この結果が図3である。

○鍵語の全体解析

図3では右端の項目名に*印を付したものが重み付けを行った鍵語である。

人物の、清顕、聡子、本多、および「恋*」のパターンは、ほぼ各章にまんべんなく流れよく出現している。もちろん詳細にみればそれぞれ、章によっての頻度の多寡が作品構造を支えていることは前述した。地図では、たとえば恋*が後半で姿を隠すのは、おそらく恋が成就した後、いつまでも恋恋と連呼しないのが、三島作品の優れたところであろう。

それに比較して地図をみると、輪廻*、転生*、夢日記*、黒子*らの出現パターンはいずれも特異である。極端な偏在だと言って良い。この理由は、文学作品でのレトリックとは、言葉で対象自体を指すだけでなく、文章表現した結果が一つの象徴概念を表しているからだと判断してもよいだろう。

転生概念で例を示すなら、珍しい「黒子」が一巻の清顕にあった、後日、それが二巻の飯沼勲にもあった、とわずかに一巻あたり一度の「黒子」用例でも、たったそれだけで「転生」を仄めかし、黒子や転生という言葉そのものの使用は極限にまで押さえられ、『豊饒の海』全体で「輪廻転生」を表している。そのような手法が、ある種の芸術性の高い作品には顕著であると仮定しても良いのではなかろうか。

○唯識、輪廻、夢日記、黒子、転生

唯識は仏教用語である。日本では法相宗の教義であり、現代風に訳せば主観的・観念的な世界把握といえる。心=識がこの世界および自己を表し出す。しかも、その識には階梯があり、アーラヤ識が根元的な識であると説く。作品の中では、清顕の夢の世界で見た夢がこの世であり、清顕は夢の中に生きている、というような、この作品の表現を支える哲学として用いられている。

輪廻とは、この世に生きとし生けるものは、車輪の回転のように無限に生まれ変わり流れていくという考え。転生は、この作品では輪廻思想のもとに、具体的に人が別の者に生まれ変わる事実を表現した結果である。すなわち、輪廻は考え方、転生はその結果生じた「生まれ変わり者」をさす。清顕は、二巻で飯沼勲に、三巻でジン・ジャン（一卷と同名だが、パッタナディッド殿下の末娘）に、そうして最終巻では安永透に生まれ変わる。安永の場合には、物語の破調をもたらす。

夢日記は、清顕の夢の内容を記した日記である。黒子は清顕の脇腹に三星のようにあり、転生者の証となる。それを確認する証言者は本多繁邦である。

○門跡

月修寺の門跡は、聡子の大伯母であり、地図からはパターンが鍵語に近いものと判定できる。門跡の出現章は、冒頭に近い3章、後半部の44、46章、そして終章直前にあたる54章と、非常に特異性が高く、後半は特に「唯識」との共起が顕著である。

読了後の作品全体から見渡せば、門跡は明確に「鍵」になる人物である。

奈良県帯解月修寺で剃髪した聡子に逢いに来た清顕は、聡子にも門跡にも会えず、帯解の宿「葛の屋旅館」で病あつく伏す。電報で駆けつけた本多は、門跡に面会かない、そこで迂遠とも思える仏教の教義を聞く。唯識三十頌をはじめとする唯識論である。

本多は、門跡の仰言るそういう一見迂遠な議論が、現在の清顕や自分たちの運命を、あたかも池を照らす天心の月のように、いかに遠くから、又いかに緻密に、照らし出しているかに気づかなかった。(54章)

門跡は将来の「転生証言者」本多に、唯識の教義を語る鍵となる人であった。彼女はまず冒頭近くで、聡子の大伯母、奈良県帯解にある法相宗月修寺門跡として現れた。幼少時綾倉家で縁の深い清顕は尼門跡に「島の上から深い敬礼」をした。その時、松枝侯爵邸の庭の「九段の滝」に黒犬の死骸をみつけ供養した門跡は、今、聡子を附弟とし、本多繁邦に唯識をさとす。論し終えた次の章は、第55章であり一巻が終わる。つまり、門跡は冒頭で清顕と聡子と本多の

間近に立ち、終末を月修寺で本多とともに収める、鍵となる人物なのである。やがて将来、聡子が門跡となり、さらに遠い遙か先、綾倉聡子はあとかたもなく現世から消え失せることになる。

4. 2 鍵語のクラスター分析

人物と鍵語とを、その各章における頻度数によってクラスター分析した樹図（デンドログラム）が図4である。分析方法は、図3と同じく階層手法のうち

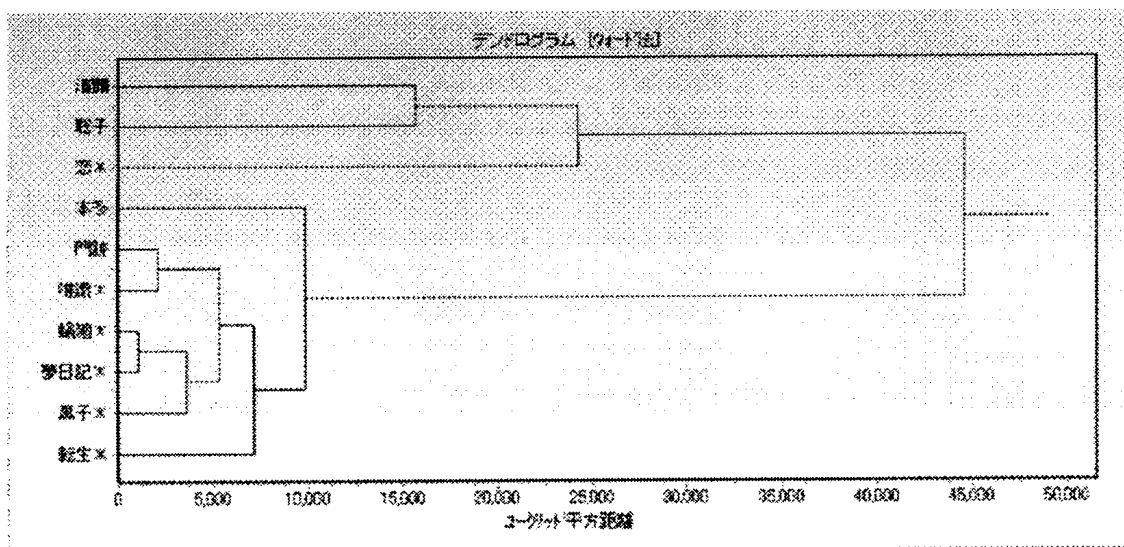


図4：鍵語と人物の分類

一般的なユークリッド平方距離をもとにウワード法を用いた。

この樹図を絵解きしてみると、以下のようなになる。

- (1) 清顕と聡子はグループを作り、それは [恋] にまとめられる。
- (2) 本多は、(1) 以外の重要な鍵をすべて統括し、二人の [恋] に関わる。これを観察者 [本多] とする。
- (3) 門跡と唯識とはグループを作り、それを [門跡] とする。
- (4) 輪廻と夢日記とはグループを作り、それを [輪廻] とする。
- (5) 清顕の黒子と [輪廻] とはグループを作り、それを [黒子] とする。
- (6) [門跡] と [黒子] をあわせたとき、壮大な [転生] が生まれる。
- (7) [本多] は [転生] を予感しながら、二人の [恋] に関わる。

(8)『春の雪』のテーマは、清顕と聡子の〔恋〕に、
〔転生〕の予感のもとに関わる〔本多〕の観察の記録である*9。

以上の絵解きのように、鍵語の樹図(図4)は明瞭であり、3.4での登場人物の樹図(図2)よりも解釈が容易である。これは鍵語の出現パターンが、登場人物以上に特異であることから、分析が明快になったと考えている。また、この樹図という本文の可視化手法が、小説構造の鍵語の関係をより一層分明にしたと言って過言ではない。すなわちクラスター分析は作品の概念群を表す鍵語間の階層性を明確にする手法であると結論づける。

まとめ

『春の雪』の小説構造を、登場人物と鍵語によって分析した。登場人物については頻度の高い者から、松枝清顕、綾倉聡子、本多繁邦、蓼科、飯沼、松枝侯爵、綾倉伯爵、門跡、ジャオ・ピー(パッタナデイド)、クリッサダ(クリ)、ジン・ジャン(月光姫)の11名を選んだ。

K T 2システムにより、文章地図として可視化し、各人物の関係を仮定し、おのおのを実際の文章にあたり、妥当性を見た。この文章地図からの主な結論として、本多繁邦の「観察者・証言者」の役割を客観的に導出できた。

さらにクラスター分析により、登場人物の分類を行った。このことから、登場人物の位置(章)による頻度は、人物の役割を文章地図に明示することが証明できた。またこの頻度を用いたクラスター分析の樹図は人物同士の遠近を知る指標となった。これらの事実から、小説の展開が明白になり、小説構造を客観的に把握することができた。

*9 クラスター分析の範疇では、(7)と(8)との解釈は妥当性を欠く。図4では恋*の収束位置や、本多と恋*との収束位置は、ともに距離が大きく右に外れ、収束することのクラスター上での意味は無いと考えて良い。(7)と(8)の解釈は本文参照によってこそ、意味を見いだせることである。

これらを補強するために、小説構造の要素概念を代表する言葉を「鍵語」として、人物および鍵語の文章地図および樹図を見てみた。鍵語としては、恋、唯識、輪廻、転生、夢日記、黒子の6用語を選び、各頻度に9倍を乗し重みとした。この結果、文章地図では「門跡」が鍵語と似たパターンを持つことを発見した。この鍵語のクラスター分析による樹図は今回の場合、非常に的確なクラスターを描き、鍵語の頻度の多寡が概念群相互の関係を表し、小説構造をさらに明確にすることが分かった。

以上、登場人物、および鍵語の用語頻度によって、三島由紀夫『春の雪』を分析した結果、中間の章にある二つの章（25章、30章）が空白共起として作品展開の転機となり、そこに挟まれた踊り場がこの作品の分水嶺（27章）となっていることを明確に可視化できた。さらに、鍵語の用例は非常に些少であり、それは直接的な指示ではなく、鍵語群として構造を持ち、それが小説構造として作者の意図を明示していることが分かった。このような高度な文章および小説構造は、すなわち『春の雪』が「芸術作品」であることを裏付けていると言ってよいであろう。

謝辞

長尾真博士の我が国における甚大なる自然言語処理研究に謹んで敬意をあらわす。

大阪大学人間科学部川端亮氏とは、多変量解析・クラスター分析など、データマイニング、テキストマイニングに関してさまざまなディスカッションを行った。また、東京在住の狩野淳子氏には基本データ整理に種々助力を頂いた。いずれも、記して感謝する。

平成十三年九月三十日 谷口敏夫 識